

導入

荒川 歩
(名古屋大学)

はじめに、今回の企画趣旨を簡単に説明させていただきます。現在日本では、日本質的心理学会ができるなど、質的研究が盛んになっています。

現在のフィールド研究に繋がる一つの契機は、やまだようこ先生編集の「現場（フィールド）心理学の発想」（1997）であり、「カタログ現場（フィールド）心理学：表現の冒険」（やまだようこ・サトウタツヤ・南博文（編），2001）であり、2002年から刊行が始まった「質的心理学研究」でした。質的心理学研究の発刊からわずかに5年ですが、このわずかな期間でフィールド研究・質的研究というものは、外側からの見られ方だけでなく、その内容もかなり変化したように思います。

今回ご登壇いただく皆さんは30代前半、フィールド研究の成長とともに大学院生時代をすごした世代です。先に言及した先生方のようにすでにかかなりの業績をまとめられた上でフィールド研究を構想した世代とは違いますし、昨今の大学院生のようにすでに質的研究があるなかで学んできた世代とも違います。まさに、自らの研究者としてのトレーニングとフィールド研究の展開が同時であった世代です。

登壇者を簡単にご紹介しますと、松嶋さんは、「エスノメソドロジー」という方法の実践を通して更生保護施設でフィールドワークをされており、その成果は「関係性のなかの非行少年：更生保護施設のエスノグラフィー」（新曜社）にまとめられています。また、最近ではフィールドの幅を拡げておられます。

2番目の話題提供者の大倉さんは、「語り合い」という方法の実践を通して青年期のアイデンティティ拡散状態についてフィールドワークされており、その成果は「拡散：ディフュージョン：『アイデンティティ』をめぐり、僕達は今」（ミネルヴァ書房）にまとめられています。

3 番目の話題提供者の松本さんは、「同行調査」という方法の実践を通して高齢者の外出を対象にフィールドワークをされており、各種論文等でその成果をまとめておられます。

最後に司会の徳田さんは、成人期以降の女性の発達や裁判における被害の語り／聴き取りなど様々なところでフィールドワークをされています。

今回は、登壇者ご自身のフィールドワーク実践の中での変化を中心に話題を提供していただき、フィールド研究の最先端では今どのような問題を抱え、どのような未来に向かおうとしているのかについて議論したいと思います。とくに今回は総合議論の時間を非常に長く取っています。フロアの皆さんも一緒に、フィールドワークの内側から、フィールドワークの可能性を探ってみたいと思っています。